

コルネイユの悲劇における結婚の役割

永井 典克

喜劇における結婚、悲劇における死

フルチエールの定義によると、「Comédie」という単語は劇作品一般を指すが、「特に心地よく、血にまみれていない出来事と、高貴ではない人々を描く」喜劇を意味するともされている。17世紀フランスでの喜劇は、登場人物の結婚で終わることが多く、同時に結婚する組の数が多ければ多いほど喜ばれた。これに対して悲劇は「舞台において高名なる人々のよく知られている行為を描く。しばしば結末は不幸なものである」とフルチエールは定義しており、実際にも悲劇は主人公の死で終わるものが多い。ところで、アリストテレスの定義に従えば、悲劇は「一定の大きさをそなえ完結した高貴な行為、の再現であり、快い効果をあたえる言葉を使用し、しかも作品の部分部分によってそれぞれの媒体を別々に用い、叙述によってではなく、行為する人物によっておこなわれ、あわれみとおそれを通じて、そのような感情の浄化を達成するもの¹」であり、それが死で終わる必然性は必ずしもない。17世紀フランスを代表する劇作家の一人ピエール・コルネイユは、悲劇と喜劇の違いを「悲劇にはよく知られ、驚異的かつ重大な主題が使われるが、喜劇では普通の陽気な主題が使われるという点で異なっている。悲劇は主人公に大きな危険を要求するが、喜劇では登場人物のなかでも主要な位置をしめる人物に不安、不快を与えることで満足する²」というように説明している。彼にとって、悲劇と喜劇の本質的な違いは、そこに「死」もしくは「結婚」が存在しているかないかによって起きるものではない。実際、コルネイユが悲劇の主人公に要求する「大きな危険」は、彼を死に至らせるほどのものではなくてよいことが多かった。これは、アリストテレスが悲劇に与えた「哀れみ」と「恐れ」の2つの役割のうち、「哀れみ」のほうをコルネイユが重視しており、「哀れみ」こそが悲劇に不可欠の要素だと考えていたことによると

¹ アリストテレス、『詩学』、松本仁助・岡道男訳、岩波文庫、1997年、p.34。

² Pierre CORNEILLE, *Discours du poème dramatique*, in *Œuvres Complètes (OC)*, t. III, éd., Georges COUTON, « Bibliothèque de la Pléiade », 1987, p. 125.

ころが大きい。「恐れ」は、おもに主人公が殺されることによって起きる。もし「恐れ」が必要なものでなくなれば、悲劇においても死ではなく、幸福な結末を迎えることが可能になるだろう³。

コルネイユが舞台に乗せる悲劇は死で終わる必然性がなく、主人公は、陥っていた困難、危険から抜け出すことが可能であったことになる。そのため、コルネイユの悲劇はしばしば登場人物の結婚によって終わる。しかし、このような手段は悲喜劇においては常套的なものであるが、悲劇においてはかなり特殊なものであると言わざるをえない。例えば同じ17世紀を代表する劇作家ラシーヌの悲劇は決して結婚で終わることはない。従って、コルネイユの悲劇における結婚を調査することは、この劇作家の独創性を明らかにするものであろう。

まず、コルネイユが、主人公に要求する「大きな危険」とは、まさにこの結婚を妨げる対立関係から生じるもののことであった。このとき、結末における結婚はこの対立関係を解消し、和解を象徴するものであったことは容易に想像がつく。コルネイユ最後の悲劇『シュレナ』*Suréna* (1675年)を見ることにしよう。この悲劇は結婚で終わるものではないが、コルネイユ悲劇における結婚の役割を考える際の手がかりを与えてくれる。

パルティアの王オロードの将軍シュレナとアルメニアの王アルタバーズの娘ユリディースは愛し合っている。オロードの息子パコリュスとシュレナの妹パルミスも愛し合っている。シュレナとパコリュスの間はパルミスを通して、義理の兄弟となるはずの安定した関係にあったことになる。しかし、その関係は崩れ去る。オロードがアルメニアの王との関係を強化するため、息子パコリュスとユリディースを結ばせようとしたからである。シュレナとパコリュスは、ユリディースをめぐる対立する。

シュレナは、パコリュスとだけ対立しているのではない。パコリュスの父とも対立関係にあった。王オロードはシュレナの力を恐れていたからである。シュレナただひとりが彼を亡命生活から呼び戻し、篡奪されていた王位を取り戻してくれた。だが、シュレナの行為にどのように報いたらよいのか彼には分からない。

私の王座を分け合えばよいのか。すべては彼のものになることであらう、もし彼がこの王座の支えだけであることを欲したのでないならば。

³ Georges FORESTIER, *Essai génétique théâtrale : Corneille à l'œuvre*, Klincksieck, 1996, p. 109.

私が王座を失い、涙に暮れていたとき、彼は壁を破りつつあった。
私が神々に呼びかけていたとき、彼は戦に勝ちつつあった。
私はそのことに体を震わせ、顔を赤らめ、憤慨する。そして
いつか彼が自らの手で報酬を得ようとしなしか恐れる。
彼の所有している名声と運すべてにおいて、
彼の運は私に重荷となり、彼の名声は私を悩ませる⁴。

それに対してオロードの将軍の一人シラースが次のように助言する。

陛下、そのような困惑から逃れるために、
健全なる政策は2つの非常手段を許しています。
シュレナが何をしたにせよ、それに対し何を覚悟しなくてはならないにしても、
彼を滅ぼすか、婿にするのです⁵。

対立する相手は滅ぼすか、義理の息子にするしかない。このシラースの台詞はグ・ド・バルザックの『政治論⁶』からの引用であり、この結婚が極めて政治的なものであることを示している。この助言をよしとしたオロードは、シュレナを自分の娘のマンダヌと結ばせることを決意し、次のようにシュレナに言う。

思えばか、必要な場合には私の怒りに立ち向かうためか、
あなたはあらゆる場所に、無数の部下を連れ歩いている。
この部下の数は臣下には普通許されるものでない。
そして、率直に話をするならば、
結婚の絆によって義務が生じない限り、
あなたが私の支配下にあるとは信じられない⁷。

この台詞も、コルネイユ悲劇において、結婚がまず政治的対立の解消に用いられるものであることを示している。この悲劇では、名誉に関する対立関係がオロードとシュレナの間に、恋愛に関する対立関係がパコリュスとシュレナの間に存在するのだが、この名誉に関する対立を解消するためには、シュレナがオロードの義理の息子になることが必要であったのだ。しかし、当然このような解決策は、愛情の問題を置き去りにするものである。シュレナと

⁴ Pierre CORNEILLE, *Suréna*, acte III, scène i, v. 715-722.

⁵ *Ibid.*, acte III, scène i, v. 727-730.

⁶ Guez de BALZAC, *Dissertations Politiques*, III, « Mécènes » dans *Œuvres*, 1665, t. II, p. 449.

⁷ Pierre CORNEILLE, *Suréna*, acte III, scène ii, v. 895-900.

ユリディースが愛情を選び、オロードの提案を拒否したとき、オロードはシラスの助言したもうひとつの解決策を取らざるを得なくなる。シュレナは心臓を矢で打ち抜かれて死ぬことになるだろう。

宮廷から外に出たか出ないかのうちに
矢が誰のものとも知れぬ手から放たれました、
2本の矢が続いて放たれ、3本ともがこの勝利者の胸に刺さったため、
彼がその場で血の海に沈むのを私は見たのです⁸。

シュレナは義理の息子になることを拒んだため死んだと言える。

ここで問題にしたいのは先ほどのシラスの台詞である。義理の親子の絆を結ぶことで、対立を解消する役割を「結婚」という行為に果たさせること。この現象はあとで見ると、後期の悲劇『オトン』、『アジェジラス』、『ピュルシェリー』、『シュレナ』に続けて見られ、通常、後期コルネイユ悲劇に特徴的なマキアヴェルリ的思想の表れであると解釈されている。しかし、コルネイユの最初の悲劇『クリタンドル』から『シュレナ』までの期間に、結婚が果たす和解の手段という役割の中身が変化を遂げていることが確認される。この小論では、その結婚の役割の変化を通じて、コルネイユの悲劇群を読み返し、彼の悲劇のひとつの側面を明らかにすることを目標にした。まず、彼の悲劇群を3つのカテゴリーに分類することから始めよう。1番目のカテゴリーでは、初期から中期の悲劇群を主に取り上げる。ここでは、結婚が義理の兄弟としての和解の場面に現れるのである。

1 結婚、もしくは義理の兄弟としての和解

コルネイユ初の悲劇⁹『クリタンドル』*Clitandre* (1632年)では、王の寵臣クリタンドルは女王のお付きの女性(*fille de la Reine*)カリストと愛し合っている。彼は女王のもう1人のお付きの女性ドリーズからも愛されている。王子の寵臣ロジドールもカリストを愛しているが、報われることがない。従って、クリタンドルとロジドールはカリストをめぐる緊張関係にあったことになる。このためクリタンドルは一時、ロジドール殺害を企てたと思われ、処刑されそうになるが、無実が明らかになり助かっている。

⁸ *Ibid.*, acte V, scène v, v. 1713-1717.

⁹ 『クリタンドル』は最初「悲喜劇」として出版されているが、1660年に「悲劇」と変わっており、この間にコルネイユの「悲劇」の定義が変化したことを示している。

さて、この悲劇で、最終的にロジドールはカリストと、クリタンドルはドリーズと結ばれる。このとき、和解がなったロジドールがクリタンドルに「私のことはこれからは兄弟だと思ってください¹⁰」と言い、カリストがドリーズを抱きしめながら「私の姉妹¹¹」と呼びかけていることは重要である。実際、初め競合関係にあったロジドールとクリタンドルは、カリストとドリーズという2人の女王のお付きの女性たち(*filles de la Reine*)と結ばれることで、ある種の兄弟関係を結び、争いを解消しているからである。

このように初期の悲劇では、結婚により兄弟関係になることが争いの解決策として提示されている¹²。この解決策は王などの権威によって与えられるものであり、ここでも結婚は王子によって、クリタンドルに与えられるものであった。対立を解消する結婚は、愛情によって自発的に行われるものではないことが理解されよう。

『エラクリウス』*Héraclius* (1647年)でも、義理の兄弟関係の形成が和解の場に登場していることが確認される。主人公エラクリウスは先の帝モーリスの息子だが、その影響力を恐れる今の皇帝フォーカスの命令により殺されなければならなかった。しかし乳母レオンチーナが自分の息子レオンスを代わりに殺し、同時期に預けられていたフォーカスの息子マルシアンと偽った。そしてマルシアンのことは自分の息子レオンズということにした。

したがって、レオンズとしてのマルシアンと、マルシアンとしてのエラクリウスは乳兄弟という兄弟関係にあったのだが、エラクリウスが生きていると分かったことから2人は対立することになる。最終的にエラクリウスが皇帝の正当な後継者であると認められ、エラクリウスとマルシアンは和解した。そのとき、マルシアンはエラクリウスの妹ピュルシェリーと結ばれ、エラクリウスはレオンズの妹ユードクスと結ばれることになった。

『アラゴンのドン・サンシュ』*Don Sanche d'Aragon* (1650年)においても、この図式は繰り返される。騎士カルロス(実はアラゴンの王)はアラゴンの女王エルヴィールとカスティリアの女王イザベルから愛されている。エルヴィールはカルロスが自分の兄弟であることをまだ知らないため、彼女がカルロスを愛しても問題にはならない。しかし、彼女がカルロスの妹であることが後に、重要となるだろう。彼女と結婚する者は、必然的にアラゴンの王と

¹⁰ Pierre CORNEILLE, *Clitandre*, acte V, scène v, v. 1858.

¹¹ *Ibid.*, acte V, scène v, v. 1862.

¹² 結婚が直接、和解の道具として用いられなくとも、それは和解の場に象徴として登場する。

義理の兄弟関係を結ぶことになるからである。

さて、カスティリアの女王には騎士と結婚することが許されておらず、イザベルはカルロスを諦めるほかに、カスティリアの貴族アルヴァール・ドリュンヌたちが彼女の結婚相手に選ばれた。しかし、アルヴァールは女王イザベルではなく、エルヴィールのことを愛している。カルロスとアルヴァールは、イザベル、エルヴィールという同じ女性たちを取り合っていることになることに注目しよう。カルロスとアルヴァールは対立関係にあったのだ。当然、コルネイユの悲劇では、女性を取り合うということは、単に恋愛の問題にとどまるものではない。それは常に政治の問題でもあり、そのため時に結婚相手は交換可能なものとして存在する。

この悲劇は、最終的にカルロスが正当なアラゴンの王であることが判明し、イザベルと結ばれ、アルヴァールはエルヴィールと結ばれることで終わる。カルロスとアルヴァールはエルヴィールを介して兄弟となったことになる。このとき、2人の間の争いは解消されているのだ。

この作品の失敗をきっかけに、一時期コルネイユが劇作から遠ざかることになった『ペルタリート』*Pertharite* (1653年)に現れる結婚の役割は注目に値する。争いの解決が結婚によって義理の兄弟になるという私たちがすでに見てきたものであるが、争いの発端もまた兄弟間の問題であるからだ。これは、結婚は兄弟間の抗争をも終わらせることができることを意味している。

ロンバルディアの王ペルタリートの妹エドゥイージュは、兄を負かして王となったグリモアルドを愛している。彼もかつては彼女を愛していたが、今は亡き者となったと思われるペルタリートの妻ロドランドを愛している。しかし、ロドランドはペルタリートに忠実で、グリモアルドの愛を受け入れようとしない。業を煮やした彼は彼女の子を殺すと脅すことまでする。この悲劇の中心に、グリモアルドとペルタリートの間のロドランドをめぐる争いがあった。この争いは、ペルタリートが戻ってきて、グリモアルドが彼に王権を返し、エドゥイージュと結ばれた時、初めて解消されるものであった。このときグリモアルドはエドゥイージュを介してペルタリートと義理の兄弟関係を結んでいる。

このペルタリートとグリモアルドの間の争いが、実はペルタリート、ガンドゥベール兄弟の争いが原因で起きたものであったのだ。

しかし、あなたは忘れています。生まれによって、
兄が最高権力者となったにもかかわらず、
彼[ペルタリート]は、自分がその支えであるべき王権を

共有しようと欲したということ。
そして、ミラノにペルタリート、パピアにグンドゥペールと
ロンバルディアに2人の王が誕生することになったことを。
グンドゥペール王は弟が国を治めているのに我慢ならず、
自らの手中に収めようと欲したのです¹³...

このグンドゥペールの支援にきたのがグリモアルドであった。

後に見るように、コルネイユの悲劇では、兄弟間の抗争が悲劇の発端になっていることが多い。そして、兄弟間の争いに関しては、結婚によって義理の兄弟になるという解決策は無効なものであり、この争いをいかに終わらせるかが問題となるのだが、ここで作家はグンドゥペールとペルタリートの兄弟の争いを、グリモアルドとペルタリートの争いに移すことにより、義理の兄弟となることによる解決策を可能にしている。

さて、ラシーヌの悲劇『アンドロマック』がこの悲劇を下敷きにしていることに初めて気がついたのはヴォルテールであるが、オレストはエルミオーヌを、エルミオーヌはピリュスを、そしてピリュスはエクトールの寡婦アンドロマックを愛するラシーヌの悲劇では登場人物の間に血の繋がりはなかった。コルネイユの悲劇を理解する鍵の一つは確かにこの結婚によって築かれる血縁関係にあったと言えよう。

復帰第1作目の悲劇『エディップ』*Edipe* (1659年)においても、結婚によって築かれる血縁関係が争いの解決に大きな役割を果たすことに変わりはない。しかし、この悲劇は同時に、結婚は実の兄弟間の抗争に対して無力であることを予兆するものでもあった。

エディップの父殺し、近親相姦のため、災厄に襲われているテーベが舞台である。王エディップの姉妹ディルセのもとにアテネの王子テゼが求婚に来ている。この結婚が成立すれば、テゼとエディップの間には、義理の兄弟関係が結ばれることになるのだが、エディップはまだ自分の生まれを知らないため、テゼと義理の兄弟になるとは思っていない。ディルセはエディップにとって、血の繋がっていない娘でしかなかった。エディップは、テゼとディルセが結婚したら、自分の王位が脅かされるのではと危惧している。

しかし、テゼのように近隣の国の王子は
私の王冠など簡単に奪い取ることができるであろう、
もし、このように危険な婚姻の絆が

¹³ Pierre CORNEILLE, *Pertharite*, Acte I, scène i, v. 27-35.

彼の国の人々に武器をとらせ、私の国の人々を蜂起させるのであれば¹⁴。

結婚が義理の兄弟関係を形成し、そのことで和平が訪れるのならば、血の繋がりに裏付けられていない結婚は、コルネイユ悲劇においては危険なものとして存在する。しかし、最後にエディップは自分の運命を知り、自分の息子である2人の兄弟の運命をテゼに託し、自らの眼をつぶす。

エディップ

テゼ殿、もしかつてあなたの心があれほど美しい恋の炎で燃えていた時と同じ支配力をディルセがまだ持っているのですしたら、私の息子たちの争いを、どうぞ治めてやっはくれませんか。彼らは血の絆によって、あなたと結ばれるのですから¹⁵。

エディップはテゼが義理の兄弟関係になるべき人物だということを理解したとき、彼を信頼することができた。このディルセはコルネイユの創造した人物であり、神話には登場しない。コルネイユは、ディルセにテゼとエディップを結びつける役割を果たさせたことになる。そのためにコルネイユはディルセを召喚したのだ。ディルセが取り持ったような結びつき以外に、コルネイユ悲劇内の争いは解消されえないのだ。

エディップの息子である2人の兄弟がテーベの王位を争い、殺し合いをすることはラシーヌの悲劇『ラ・テバイッド』などに詳しい。『エディップ』において、エディップとテゼが義理の兄弟として和解しても、次の世代の兄弟が争うことを止めることはできない。次の章で見ると、コルネイユの悲劇空間において、兄弟の争いは解消できないように運命付けられている。

ここまで結婚が紛争関係にあったものを義理の兄弟として結びつけることにより、争いを終らせる役割、もしくは争いの終わりを象徴する役割を持っていたことを見てきた。しかし、ここで疑問が浮かび上がる。たしかにこの解決策は当事者同士が最初他人であればうまくいくであろう。しかし、最初から当事者同士が兄弟である場合はどうであろうか。『ペルタリート』では最初の争いはペルタリートとグンドゥペールの兄弟間のものであったが、最終的な調和関係はペルタリートとグリモアルドの間で結ばれていた。『エディップ』では、エディップとテゼが、ディルセというコルネイユによって作ら

¹⁴ Pierre CORNEILLE, *Œdipe*, acte I, scène iii, v. 269-272.

¹⁵ *Ibid.*, acte V, scène vi, v. 1873-1876.

れた人物を介して兄弟間の調和関係が築かれた。しかし、例えばエディップの2人の息子たちはどうしたらよいのであろうか。

本当の兄弟間の争いでは、容易に想像がつくように、結婚によって義理の兄弟関係を築くことで争いを解消することは(『ティットとベレニス』ではある意味で、それが可能にされているのだが)不可能に近い。そこで、コルネイユ悲劇の第2のカテゴリーとして、兄弟間の争いが問題になっている悲劇群を取り上げることにはしたい。兄弟間の争いにおいて、救いの可能性はあるのであろうか。

2 兄弟間の争い

コルネイユは悲劇が引き起こす「哀れみの感情」についてアリストテレースを引用しながら次のように述べている。「哀れみの感情」を引き起こし、悲劇にもっとも適した題材は敵同士の争いではなく、近親の間、もしくは愛情によって結びつけられた人間同士におきる争いである。この例として彼は同じくアリストテレースを引用しながら「夫が妻を、母が子供を、兄弟が姉妹を殺すか、殺そうとするようなとき¹⁶」という場合を挙げている。コルネイユは1647年にも『エラクリウス』の「読者への序文」で、アリストテレースの同じ場所を引用しながら、悲劇では敵が敵を討つ場合には哀れみも恐れも生じないため、身近なもの間におこる *extraordinaire* な出来事を描くべきだと主張していた。その例として「父が息子を、妻が夫を、兄弟が姉妹を殺すような¹⁷」場合があると、彼は述べている。ところで、この部分はもともと「親しい関係にある人たちのあいだにおいて苦難が生じるなら、たとえば、兄弟が兄弟を、息子が父親を、母親が息子を、息子が母親を殺害したり、殺害しようと企てたり、そのほかこれに類することを行ったりする場合—このような場合を作者は求めるべき¹⁸」とあるのだ。これはフォレストエの指摘するとおり、『オラース』で兄が妹を殺したことに對する非難に答えるものであったことは十分考えられることである¹⁹。が、コルネイユが「兄弟が兄弟を」殺すという言葉を避けているように見えることは十分注目に値する。何故ならば、コルネイユの悲劇に見られる近親の間における争いのうち最も

¹⁶ Pierre CORNEILLE, *Discours de la tragédie, Œuvres complètes*, t. III, éd. Georges COUTON, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1987, p. 151.

¹⁷ *Au Lecteur d'Héraclius, O. C.*, t. II, p. 357.

¹⁸ アリストテレース、『詩学』、第14章53b, p. 56.

¹⁹ FORESTIER, *op. cit.*, p. 110-111.

多いものは、まさに彼が隠したものの、彼が述べていないもの、つまり兄弟間の抗争なのである²⁰。さらに、このときコルネイユの悲劇では、兄弟間の抗争はアリストテレスの定義した「兄弟が兄弟を殺害したり、そのように企てたりする」というものから少しずれたものとなっている。兄弟間の争いは、大抵の場合、実際に殺し合いになることは避けられている。

さて、兄弟殺しが問題となる最初の悲劇は言うまでもなく『オラース』*Horace* (1641年)であるが、この悲劇は他の悲劇とは一線を画している。コルネイユ悲劇において、兄弟殺しの罪は重いのだが、『オラース』は兄弟殺しが実際に行われ、それがローマの維持のため、王の名の下に許される唯一の悲劇であるからだ。そして、これ以降、兄弟殺しは避けられるか、必ず王もしくは神の手によって罰せられるもの（『ポンペの死』、『アッチラ』）となっていく。

オラースとキュリアスはそれぞれの国の威信をかけて、戦わなければいけない。しかし、この2人は二重に兄弟の絆で結ばれている。オラースはキュリアスの妹のサビーヌと結婚しており、キュリアスはオラースの妹カミーユを愛しているからである。このサビーヌはコルネイユの創造した人物であり、コルネイユ自身、彼女がうまく創造されたものであると言っているが²¹、サビーヌの存在によってオラースとキュリアスの戦いは兄弟間の争いと変化していることは記憶に留めておきたい。キュリアスは「姉妹と結婚する前に、兄弟を殺さなければいけない²²」ことを嘆き、それに対しオラースは「姉妹と結婚したときと同じように喜んで、兄弟と戦うだろう²³」と答えている。そしてオラースは『兄弟』であるキュリアスを倒した。そのことをカミーユに責められた彼は、ローマと家の名誉を傷つけたとし、自分の妹である彼女をも殺害する。このように兄弟殺しはこの悲劇の主題であるにもかかわらず、オラースは罪を問われることはない。王チュールがローマではロムールの例もあり、解放者の兄弟殺しは耐えられるものであると宣言することで、争いは終わるからである。

²⁰ 例えば、ラシーヌの『フェードル』に見られるような父と子が同じ女性を取り合い争うということは、コルネイユの悲劇ではない。『ロドギューヌ』でアンティオキウスとセレウクスは父の愛人ロドギューヌを愛することがあっても、この時点で父親はすでに死んでいる。また「観客を驚かせることなく、2人の息子がロドギューヌを愛することができるように、父ニカノールはロドギューヌと結婚していなかった」ようにコルネイユは史実を変更することさえしている。

²¹ *Examen d'Horace*.

²² *Horace*, acte II, scène iii, v. 471.

²³ *Ibid.*, acte II, scène iii, v. 499-500.

このような奉仕者が王の力であり、
このようなものは、法を超えている。
法は黙るがよい。ローマは
建国以来、ロムールに見てきたことを見ぬ振りをするがよい。
ローマはその建国者に許してきたことを
解放者であるオラースにも許すことができる²⁴。

この悲劇は後の1668年の『アッチラ』と比較することができるだろう。『オラース』では共同体の維持に関する必要悪として容認された兄弟殺しが、『アッチラ』では共同体を脅かすもの(アッチラ)の罪として、罰せられることになる。もともと和解の道を絶たれている兄弟間の争いが、救いがないところまで進んでいった悲劇が『アッチラ』であることを私たちは見るだろう。だが、その前に、もともとコルネイユの悲劇では兄弟間の決定的な決別は避けられていることを『ロドギューヌ』、『ニコメード』において確認しておこう。

1647年の悲劇『ロドギューヌ』*Rodogune*では、シリアの王子セレウクスとアンティオキユスの2人は、亡き父デメトリウス・ニカノールの愛人ロドギューヌを愛している。彼ら兄弟は対立関係にあるのだ。しかし、この悲劇でもロドギューヌを取り合うセレウクスとアンティオキユスの間に本格的な争いは起こることはない。夫が自分を裏切ったことを許せず、また、王権が自分の手を離れることを恐れている母クレオパートルによってセレウクスが暗殺されているからだ。その時、アンティオキユスはセレウクスの死を「ああ、日の光よりも愛された弟よ、私の愛する人と同じくらい大切な恋敵よ、私は君を失い、限りない悲しみの中で、君の死そのものより大きな不幸を、君の死に見出す²⁵」と、それに相応しい態度で悼んでいる。ここで兄弟間の争いは、相手の死を願う類のものでは決してなかった。

この傾向は『ニコメード』*Nicomède* (1651年)において、更に強められる。この悲劇では、最初、兄の死を願った弟は、相手の徳に心服し、兄を暗殺しようとした者を捕らえ、引き渡すことまでする。

ビチュニーの王ブリュジウスは後妻との間にできた息子を王位につけるために、息子ニコメードを暗殺しようとする。この悲劇でローマの政策を描こうとしたコルネイユはニコメードにアルメニアの女王ラオディスを愛させていた。ローマがこの2つの国が結びつくのを恐れ、ニコメードの暗殺を願う

²⁴ *Ibid.*, acte V, scène iii, v. 1753-1757.

²⁵ *Ibid.*, acte V, scène iv, v. 1653-1656.

ようにとコルネイユは演出したのだ。そのローマは道具としてニコメードとは腹違いの弟、ローマで育てられたアタルを使おうとする。アタルはローマの思い通りに兄の栄光に嫉妬し、ラオディスを奪おうとするが、最終的にはニコメードの徳の前に平伏し、争いは終結した。このような結末が可能であったのは、コルネイユが「人が彼の徳に対して持つ尊敬の念に、情念を浄化する手段のひとつがある」と考えていたことによる。アリストテレスは悲劇がこのような手段を持つとは語っていないが、コルネイユは「アリストテレスが悲劇に規定した哀れみと恐れによる手段より、確実なものであるかもしれない。このやり方は、私たちが賞賛する徳を愛させることで、反対の悪徳に対する嫌悪感を植え付けるものである²⁶」と述べている。この手段によって、兄弟間の争いは解消された。コルネイユ悲劇の特徴の一つは、争いを解消しようとする意志が作家の内に見えることであろう。この空間において兄弟が殺しあう必要はない。

コルネイユはすでに『シンナ』*Cinna* (1643年)で、ローマ皇帝オーギュストを暗殺しようとしたシンナが、皇帝の寛容さの前に改心するという史実を描いていた。しかし、『シンナ』と『ロドギューヌ』では、抗争の終結において異なる点がある。『シンナ』では主人公は愛するものと結ばれることができたが、『ロドギューヌ』と『ニコメード』ではアンティオキウスとロドギューヌ、ニコメードとラオディスの結婚を妨げていた兄弟間の抗争が解消されたにもかかわらず、彼らの結婚は宙吊りになったままであるということである。これについては、悲劇を構成するものは主人公の災難であり、主人公がその災難から抜け出してしまえば、筋は終わりだとコルネイユが考えていたことが理由として挙げられる²⁷。物語の終わりにおいても「主人公が愛情を感じていても、適切さが許可しないのであれば、愛する人と結婚すると言わないでもよい²⁸」とコルネイユは考えていた。

ここで、「適切さが許可しない」とコルネイユが考えたのはどのような場合であったのかを調べる必要がでてくる。そして、その手がかりは『ロドギューヌ』と『ニコメード』の中にある。この2つの悲劇では、主人公の2人の兄弟が困難を克服したのは、どちらかの犠牲の上のことであったことを思い出そう。兄弟のひとりが死ぬか、相手の徳の前にひれ伏す。兄弟が同じ女性(権力)を取り合うとき、そこに結婚を介した和解はありえない。実の兄弟

²⁶ Examen de *Nicomède*, OC, II, p. 643.

²⁷ FORESTIER, *op. cit.*, p. 134.

²⁸ Pierre CORNEILLE, *Discours du poème dramatique*, OC III, p. 126.

間の争いの終結の場において、結婚という儀式が登場することはありえないことなのだ²⁹。第一のカテゴリーの悲劇群に見られたように婚姻が義理の兄弟としての和解の象徴であるとするならば、この2つの悲劇では兄弟の間に和解は成立していない。そのような和解は決して成立しない。

同じ事が擬似的な兄弟間の争いにおいても言えることを、次の『ソフォニスブ』の例が証明してくれる。

1663年の悲劇『ソフォニスブ』*Sophonisbe*は、ジャン・メレによる同名の悲劇が17世紀を通して上演されつづけたのに対して、興行的には失敗作であった。これはコルネイユが物語に付け加えた変更点が観客の趣味に合わなかったためであるが、この変更点にこそコルネイユの特徴が現れていることに注意しよう。

カルタゴの女王ソフォニスブがローマに囚われの身となるよりも、自由の身のまま死ぬことを願ひ自害することを描いたこの悲劇で、ヒロインはまずシファックスと結婚していた。しかし、彼がローマと戦って敗れたとき、彼女はローマと同盟を結んでいた王マシニッスと結ばれ、捕虜となる辱めを避けようと望んだ。従って、マシニッスとシファックスはソフォニスブを中心とした義理の兄弟関係にあったことになる。この悲劇は『ロドギューヌ』における兄弟の悲劇の変奏以外のなにものでもない。

そして、この悲劇でもマシニッスとシファックスの間には、生死にかかわるような争いが起きることはない。というのもソフォニスブは、彼女をローマの手から救ってくれなかった2人はどちらも王としての威厳にかけるとして、見捨ててしまうからである。「この二人の卑劣さは、私を二人から解放してくれるのです³⁰」と彼女は言い、自ら隠し持っていた毒を飲んで自害してしまった。この彼女の行動こそ、コルネイユが史実に加えた変更点で最も大きなものであった。もともとソフォニスブはマシニッスの贈ってくれた毒を飲んで死んだのであって、ジャン・メレはそこから恋愛悲劇を作り上げ、一世を風靡していた。コルネイユのヒロインの行動は、ジャン・メレのヒロインのそれより名誉を重んずるものであったが、その結果としてマシニッスとシファックスの間の争いは棚上げされているのだ。

1661年の『黄金羊毛』*La Toison d'or*においても、もともとルイ14世の結婚を祝うために上演された悲劇であるためでもあるだろうが、兄弟の争いは避けられている。英雄ジャゾンがコルクスに黄金羊毛を求めてきたとき、王

²⁹ ただ一つの例外を後に私たちは『ティトとベレニス』において見るだろう。

³⁰ Pierre CORNEILLE, *Sophonisbe*, acte V, scène vii, v. 1791.

女メデは彼を愛してしまった。彼女は父王を裏切り、ジャズンを助けると、彼と共に去っていく。さて、この神話に、コルネイユはジャズンとかつて愛し合ったレムノス島の女王イプシビルを登場させている。ジャズンたちアルゴナウテスはコルクスへの航海の途中、レムノス島に立ち寄っており、そこでジャズンとイプシビルは出会っていた。コルネイユは、その彼女がジャズンを追ってコルクスに現れたとしたのだ。そして、今度はメデの弟のアプシルトが彼女に恋をする。ここにおいてアプシルトとジャズンは、メデとイプシビルという二人の女性を介して、二重に「兄弟」関係を結んでいることになる。この悲劇は神話どおりにメデとジャズンが黄金羊毛を手に入れ、島を去るところで終わるが、コルネイユは一部神話を書き換えていた。神話では、メデたちは逃亡する際に、追っ手を妨げるために、弟のアプシルトを八つ裂きにして海にばら撒いていた。ところがコルネイユはジャズンたちにそのような兄弟殺しをさせていない。それどころか、神々の仲介によりアプシルトはイプシビルと結ばれる。この悲劇では兄弟殺しは起きず、弟は「兄」のかつての愛人を手に入れるのだ。そして、そのような筋立てこそが、フランス王の結婚を祝うために上演するのに相応しいとコルネイユは考えていたようなのである。

コルネイユがこのように兄弟の争いにおいて、本質的な争いを避けつづけてきたのは、兄弟が同じものを欲したとき、そこに本質的な和解はありえないからに他ならない。兄弟の争いの行き着く先は兄弟殺しでしかなかった。しかし、兄弟殺しは必ず罰せられなければいけないものでもある。

セザール(カエサル)と抗争し、敗れたポンペの姿を描いた『ポンペの死』*La Mort de Pompée* (1645年)にも、兄弟間の争いが見受けられるが、その争いは、兄弟を殺そうというところまで進んでいた。この悲劇は、兄弟殺しを企む者が受ける罰を明らかにしてくれるものである。

エジプトの王プトロメは姉クレオパートルのことを疎ましく思っている。クレオパートルがローマのセザールの寵愛を受けているため、「弟であり、王である私が、彼女の臣下になってしまった³¹」ことを彼は恨んでいたのだ。クレオパートルは史実ではプトロメの姉にして、妻であるが、コルネイユはそのことについては言及していない。

さて、プトロメはローマに追従しようと、彼を頼ってエジプトにやって来たポンペを殺した。そして、セザールにその行為を非難された彼は、「ポン

³¹ *La Mort de Pompée*, acte II, scène iv, v. 656.

ペが人間であったように、おまえも死すべき運命の人間でしかない³²」と、セザールを殺すことを決意する。セザールはクレオパートルを介して、彼の義理の兄になる存在であることに注意しておきたい。プトロメは義理の兄を殺そうとしたことになるのだ。しかし、この計画は露見し、セザールから逃げようとしたプトロメは船が沈没して死ぬことになった。この死に「兄」であるセザールは関与していない。「兄」を殺そうとしたプトロメはまさに天の配剤によって死ぬのだ。

このような現象は、兄弟間の抗争に限定されるものではない。コルネイユの悲劇空間において 2 人の人物が同じ女性(権力)を取り合い、その結果、1 人(特に身分が相手より下の人間)が、相手を殺す、もしくは殺そうと実際に行動に移す時、その者は報いを受けることになる。

エチオピアの王セフェの娘アンドロメードをジュピテル神の息子ペルセが怪物から救う神話を主題にした悲劇『アンドロメード』*Andromède* (1651 年)では、ヒロインをペルセと王族の一人フィネが取り合っていた。しかし、この抗争は最初から決着がついている。神ならぬ身のフィネはアンドロメードに襲い掛かろうとする怪物から逃げるしかないからだ。そのことを責められた彼は「ペルセは確かに英雄であるけれど、私たちのように愛情と自分の腕しか持っていなかったならば、彼はあなたのために何をしたことでしょうか³³」と言い、ペルセを倒すことを誓う。『ポンペの死』のプトロメと、このフィネの性格の相似は際立っている。しかし、数を頼みにしたところで、所詮は神の息子にかなう筈はなく、フィネは逆に殺されてしまった。王セフェは「このような企みの後では、彼[フィネ]はもはや私の一族の一員ではない。この罪は彼からその資格を失わせる。このような不敬は、私の一族の輝かしい性格を消し去るものだ。彼のことはもう記憶から捨て去ろうではないか³⁴」と宣言し、このような犯罪を企むものがどのような運命を辿るかを明確にしている。

1662 年の悲劇『セルトリウス』*Sertorius* では、スペインの王マリウスの將軍セルトリウスと、その副官ペルペンナの二人がルシタニアの女王ヴィリアートを愛しており、彼らの対立³⁵はこの悲劇の原動力となっていた。ペルペンナはセルトリウスを殺してしまったが、その時、彼は頼りにしたポンペに

³² *Ibid.*, acte IV, scène i, v. 1116.

³³ CORNEILLE, *Andromède*, acte V, scène ii, v. 1525-1526.

³⁴ *Ibid.*, acte V, scène vi, v. 1702-1705.

³⁵ この 2 人の関係は將軍とその副官というように、極めて「兄弟」のそれに近い。

は見捨てられ、セルトリウスを愛した民衆の手によって殺された。

恋敵を殺す者は報いを受ける。ましてやそれが兄弟であった場合、最も恐ろしい罰が待っている。そのことを私たちは『アッチラ』*Attila* (1668年)において見ることができる。

フン族の王アッチラはローマ皇帝ヴァランチニアンValentinienの妹オノリーOnoriaか、フランス国王メルエMerovechの妹イルディオヌIldegondeのどちらかを結婚相手として選ぶかを思い巡らしている。これが「神の禍」と呼ばれたアッチラの死の悲劇の発端であった。彼はローマ皇帝かフランス国王との間に義理の兄弟としての関係を築こうとしていたのだ。イルディオヌをフランス国王の妹としたのはコルネイユCornéilleの創作である。彼は没落しつつあるローマ帝国と、生まれつつあるフランスとの対比を試みたためだと述べているが³⁶、このためアッチラがローマ、フランスのどちらかと義理の兄弟の絆を結ぼうと望む筋立てが可能になっていることを看過してはならない。ローマ帝国と生まれつつあるフランスの対比は、義理の兄弟としてアッチラがどちらを選ぶかによって行われるものとなっているのだ。

アッチラは演劇史上例のない鼻血による出血多量が原因で死んだが、この不名誉な死の原因はかつて兄を殺したからだとして繰り返し主張されている。かつて公正であった兄ヴレダVledaを妬み、「容赦なく兄弟の血を流し³⁷」殺していたため、彼は自ら毎日血を流さなければいけなくなっていた。

この王子を墓に入れた後、
アッチラの脳から血がにじみ出るようになりました。
この血は彼の肉親殺しを罰し、毎日
驚くべき買物を兄の血に納めているのです³⁸。

『アッチラ』は兄弟の絆を結ぼうとした者が、自ら兄弟を殺していたために死ぬ悲劇であったのだ。そして、この悲劇で最も忌避される行為が兄弟殺しである。アッチラを責めるとき、オノリーは「私はあなたの例を見習って、自分の兄弟を殺すことがあるでしょうか³⁹」と言う。また、コルネイユはアッチラが支配下の王たちに持っていた力を示すために、「肉親を殺すように命じられたとしても、あえて逆らいはしなかったであろう⁴⁰」と述べている。

³⁶ *Ibid.*, Au Lecteur, O. C., t. III, p. 641.

³⁷ *Attila*, acte I, scène iii, v. 342.

³⁸ *Ibid.*, acte II, scène i, v. 379-382.

³⁹ *Ibid.*, acte III, scène iv, v. 1065.

⁴⁰ *Ibid.*, Au Lecteur, O. C., t. III, p. 641.

「兄弟殺し」という言葉がアッチラの全てを要約している。鼻から血が滝のように流れ始めたとき、彼は驚き、怒る。しかし、やがて意識は遠のき、自らが流す血の中で死んでいこうとする時、彼は「幻影のうちに兄の姿を見た⁴¹⁾」のであった。

『クリタンドル』など初期の作品では、争いは結婚によって義理の兄弟となることで解決された。それに対して、実の兄弟間の争いは、それが解消されえないが故に、常に避けられ、そうでない場合は必ず罰せられることを見てきた。兄弟間の争いは結婚によって解消されることはない。しかし、たった1つだけ兄弟の争いが結婚で終わる例がある。『ティットとベレニス』*Tite et Bérénice* (1670年)がそれである。

ローマ皇帝ティットは、コルビュロンの娘で、皇帝ネロンの親戚であったドミシーと結婚するところだ。ドミシーは、ティットの弟ドミシアンと愛し合っていたが、野心ゆえにティットと結婚することを望んでいる。ティットのほうはユダヤの女王ベレニスと愛しあっている。しかし、ローマは女王を皇帝の后と認めていない。ティットはベレニスとの結婚を諦め、もともと許婚であったドミシーと結婚することにし、ベレニスを追放する。このため、ティットとドミシアンの兄弟はドミシーを巡って争うことになった。これは同時にローマ皇帝の地位を巡る争いでもある。

さて、ティットとドミシーの結婚の4日前、ベレニスが戻ってきたところからこの悲劇は始まる。ここで、このコルネイユの作品と競争することになったラシーヌの悲劇のことを思い出しておこう。ラシーヌの『ベレニス』においては、ティットの弟は登場せず、したがって彼ら兄弟間の抗争もない。兄弟間の抗争は極めてコルネイユ的な主題であるのだ。ドミシアンの次の台詞は、まさに兄弟の争いがここで問題となっていることを明らかにしてくれる。

兄が私より早く生まれたのが、私にとって罪なのか。
彼より二年遅く日の光を見たということが
永遠に私を苦しめなければいけないのか。
あたかも彼の主人になるために生まれるべき時に
生まれることが、私が選択できるものであったかのように⁴²⁾。

⁴¹⁾ *Ibid.*, acte V, scène vi, v. 1745.

⁴²⁾ Pierre CORNEILLE, *Tite et Bérénice*, acte III, scène ii, v.809-812.

それに対してティットも兄弟こそ恐るべきものであることを教えてくれる。

しかし、君が親愛なものであればあるだけ、私は君を恐れる。
血が結ぶ者たちの絆が心地よければよいだけ
彼らの諍いは、憎しみをより苦いものにする。
より激しい侮辱のやり取りをし、怒りも大きい。
その結果はより野蛮なものとなり、血なまぐさいものとなる。
怒り狂い、本性を剥き出しにし、何でもするだろう。
50人の敵のほうが、ひとりの兄弟より、まだ憎まれたいというもの⁴³。

コルネイユの悲劇では、ラシーヌの悲劇と異なり、ローマはベレニスとティットの結婚を認めたため、彼らの結婚にもはや障害はなくなった。しかし、彼らが結婚することはない。ベレニスは彼らの結婚が悪しき前例となることを恐れ、自らローマを去ることを決意し、ティットもローマのため自らの意思でベレニスと別れることを決めた。彼らが別れなければならないのは、外的な条件によるものではなかったのだ。ティットがドミシーと結婚することを宣言したのは、帝国のためであった。しかし、彼は、自らは子をもうけることをしないと誓い、ドミシアンを皇帝の後継者として任命した。ティットは弟に「私の死後、帝国のことは確かだと思ってほしい。私が死ぬまで、兄弟として参加してほしい⁴⁴」と呼びかける。ティットとドミシアンの兄弟の抗争はここに終結している。そしてそれは、帝国及びドミシーを(時間において)共有するという形を取っているのである。兄弟間の葛藤の解消は、このように女性、権力を共有するという手段を通じてしかありえない。このことは、この後『ティットとベレニス』『ピュルシエリー』『シュレナ』の後期作品群に、ティットが「息子たちのうちに生き返るといっても、私たちが死ぬことには変わりはない⁴⁵」と言ったような子孫を持つことの空しさというテーマが現れることと⁴⁶、無関係ではなかったに違いない。

3 義理の親子関係になることという争いの解消について

兄弟としての和解が不可能になったとき、これに代わるかのように 1665 年ぐらいから見られるのが、義理の親子になるという解決策である。実は『ポ

⁴³ *Ibid.*, acte IV, scène v, v. 1378-1384.

⁴⁴ *Ibid.*, acte V, scène v, v. 1759-1760.

⁴⁵ *Ibid.*, acte V, scène v, v. 1753.

⁴⁶ OC, III, p. 1628. note de p. 1053, I.

リュクト』*Polyeucte* (1643年)でもすでに義理の親子関係(ポリユクトとその妻ポリーンの父フェリクスの関係)が見られるのだが、ここでの義理の親子関係は緊張関係を解消するためのものではなかった。権力の維持のためポリーンをポリユクトと結婚させたフェリクスであったが、ポリユクトがキリスト教に改宗したとき、彼はキリスト教徒を迫害するローマ皇帝デシーを恐れなければならなくなった。そして、ポリユクトが死ねば、かつてポリーンと恋仲であったローマの騎士セヴェールとポリーンを結婚させることで、より強力な支えを得られるだろうと考えはする。しかし、名誉を重んじる彼は決してそう願いはしない。「そのように下劣な考えに同意し、自分の名誉がそこまで落ちることがあるのであれば、天の雷に撃たれたほうがましだ⁴⁷」と彼は言っている。『ポリユクト』における義理の親子関係は、争いの解消策として作用していないのだ。『メデ』*Médée* (1634年)のことを思い出してもよいであろう。ジャソンは妻メデを捨て、クレウーズと結婚することで、その父コリントスの王クレオンと結びつきをもちと欲した。そこから悲劇が始まったではなかったか。また、『テオドール』*Théodore* (1646年)に見られる義理の親子関係も不吉なものであった。ヴァランスの妻マルセルは、連れ子のフラヴィーと、ヴァランスの息子ブラシッドを結婚させようとしている。しかし、フラヴィーではなくテオドールを愛しているブラシッドがこの結婚を拒否したため、マルセルはテオドールがキリスト教徒であることを理由に彼女を殺させた。義理の親子関係を結ぶことは、コルネイユの初期悲劇では、和解を生み出すどころか、争いをもたらすものであったのだ。ところが1665年以降の作品群には冒頭の『シュレナ』の例に見たような「婿にする」ことで問題を解決しようとする動きが出てくる。このことが最初に現れるのが次に調べる『オトン』*Othon* (1665年)であった。

ローマの元老院議員オトンはネロン帝の時代に皇帝のお気に入りであったが、愛妾ポッペを彼と取り合い、ルシタニアに左遷させられた。しかし、ガルバ帝の時代にローマに帰ってくると、彼かピゾンのどちらかが次のローマ皇帝になれるまでになっている。ピゾンはこの悲劇に実際に登場することはないが、同じ皇帝の継承者という地位(それは同時に、ガルバ帝の姪カミーユの夫となることでもある)を取り合うピゾンとオトンが、この悲劇では対立関係にある。

オトンは執政官ヴィニウスの娘プロチーンを愛しているが、ピゾンの勢力

⁴⁷ Pierre CORNEILLE, *Polyeucte*, acte III, scène v, v. 1058-1060.

を恐れるヴィニウスは彼に勝つために、もし娘を愛しているのであれば、「より確かな愛の証拠として、偉大な男の、ローマを治めるに相応しい人間としての証拠として、彼女をもはや愛さないことが必要だ⁴⁸」とオトンに告げる。驚くオトンにヴィニウスは、プロチヌではなく、ガルバ帝の姪カミーユこそを愛するようと言う。ガルバ帝はカミーユの夫となる人物こそ、皇帝の後継者とすると言宣していたからである。ヴィニウスが気が付いていたように、ガルバ帝は血の繋がりを持つことにより「堅固で不安のない権力を望んで⁴⁹」いた。ヴィニウスは、オトンがガルバ帝と血縁関係になれば、必然的にピゾンとの争いを避けられると考えたのである。

この瞬間以降、コルネイユの悲劇では、義理の親子関係になることが、争いを避けるための手段として存在するようになった。この手段は、兄弟の間に起こりえる最も恐れるべき争いを避けることすら可能にするものであった。

『アジェジラス』 *Agésilas* (1666年)において、スパルタの将軍リザンドルの2人の娘エルピニスとアグラチッドは、それぞれパフラゴニの王コチュスと、ペルシアの貴族スプリトリダートと結婚するところである。コチュスとスプリトリダートはこの結婚によって、権力者リザンドルと血縁関係になることを欲していた。しかし、実のところエルピニスとスプリトリダートは愛しあっていて、コチュスはスプリトリダートの妹マンダーヌと恋仲であった。そこにもう一人の人物が絡むことになる。スパルタの王アジェジラスはかつてアグラチッドを愛していたが、今はマンダーヌを愛している。しかし、スパルタの王はペルシアの娘であるマンダーヌと結婚することが許されていない。彼は自らの愛を克服し、マンダーヌを諦めると、リザンデルの娘アグラチッドと結婚することに同意する。最終的に、アジェジラス—アグラチッド、スプリトリダート—エルピニス、コチュス—マンダーヌの3組の夫婦が誕生した。このとき、前の2組はアグラチッドとエルピニスの2人が姉妹であることによって、後ろの2組はスプリトリダートとマンダーヌの2人が兄妹であることによって、3組は血縁関係になっている。つまりアジェジラス、スプリトリダート、コチュスが義理の兄弟となることで物語は終わる。従って、これは第1のカテゴリーに見られた義理の兄弟関係を婚姻によって結ぶことで、争いを解消するタイプの悲劇であるのだが、実はこの錯綜した人間関係の物語に隠れて、もう一つの対立関係とその解消の物語が存在する。

リザンデルとアジェジラスはもともとエルキュール(ヘラクレス)の子孫で

⁴⁸ Pierre CORNEILLE, *Othon*, acte I, scène ii, v. 121-123.

⁴⁹ *Ibid.*, v. 161.

あり、血が繋がっていた。しかし、彼らは憎しみあっている。アジェジラスの家系は王位につくことができるが、リザンデルの家系はできないからだ。アジェジラスとリザンデルの争いは、兄弟の家系の争いであった。『アジェジラス』は、この兄弟間の抗争がまさに義理の親子になることで解消されている点で注目に値する。最初のリザンデルとアジェジラスの兄弟の家系の葛藤は、アジェジラスがリザンデルの娘アグラチードと結婚し、この2人が義理の親子となることで解消されるのだ。

このように、1665年以降の悲劇では、結婚によって義理の親子関係を結ぶことが次第に重要な役割を担うようになっていく。次の『ピュルシェリー』*Pulchérie* (1673年)において、いよいよ、このような結婚が作品の中心に位置することになる。

ローマの女帝ピュルシェリーは弟のテオドーズの代わりに政権を握っていたが、彼の死後、政権を譲らなければならなくなると、年老いた元老院議員マルシアンと性的交渉なしの結婚をし、権力を保った。彼女の死後、マルシアンはレオンという人物を後継者に任命した。このレオンに対し、アスパールが反乱を起こしたがすぐに鎮圧された。

この史実を、コルネイユはまずピュルシェリーとレオンが愛し合っているように書き直した。そして悲劇の中心にある主人公が陥る困難は、2人が結ばれるのを妨げる人間関係である。

まずアスパールとレオンの関係が2人の結婚を妨げる。アスパールはレオンの姉妹のイレヌを愛していた。従って、アスパールとレオンは「兄弟」関係にあったと考えてよいのだが、野心家のアスパールはピュルシェリーを狙っている。彼ら「兄弟」はピュルシェリー(皇帝の座)をめぐる対立する。しかし、史実でこの戯曲以降彼らの間に権力争いがあるように、この「兄弟」間の争いは解消されることがなかった。

次にマルシアンの存在が2人の結婚に影を落とす。ローマはピュルシェリーが元老院議員のマルシアンと結婚することを望んでいた。ここにマルシアンとレオンの間にも対立関係が生じたことになる。最終的には、ピュルシェリーは政権を保つため、マルシアンと結ばれることを選んだ。しかし、ピュルシェリーは、レオンに恋しているマルシアンの娘ジュスティヌとレオンが結婚するように勧めている。これはコルネイユの創作した個所であり、注目しなければならない。ピュルシェリーは、マルシアンとレオンを義理の親子とすることで、レオンに政権を譲り渡すことができるよう望んだのである。そのようにコルネイユは史実を書き換えたのだ。ピュルシェリーはレオンへ

次のように言う。

私が彼[マルシアン]の手に帝国を委ねるのは、あなたのためなのです。
私が彼を選ぶのは、あなたのために帝国を保っておきたいからです。
彼のように、この預かり物に相応しい人間になってください。
彼の高齢はあなたにやがて帝国を譲り渡させるでしょう。
彼のあとを一步一步ついていき、その道を辿ることで、
首長の地位を疑いないものにしてください。
彼のもとで、統治する術を学んでください。
それは彼以外の人間ではあなたにうまく教えることができないものでしょう。
そして、私が期待するものを確かにするために、
王座と結びつきなさい。彼の義理の息子となるのです。
私はあなたにジュスティーンヌを授けます⁵⁰。

この台詞は、マルシアンとレオンの間の対立が、義理の親子となることで解消されることを証明している。

兄弟の間の不和が問題になるときには、それまでの結婚＝兄弟としての和解という公式は成り立たない。そのとき、結婚＝義理の親子としての和解という公式が有効なものとなる。だが、レオン、アスパールの対立のように、その解決策は常に有効なものとはならない。また、この小論の冒頭部で見たように、義理の親子としての和解としての結婚という解決策は、最後の悲劇『シュレナ』では主人公によって全く否定されていた。『シュレナ』は、義理の親子としての和解を望んだことから、義理の兄弟としての関係が不可能になることから始まっていた。シュレナとパコリユスは本来シュレナの妹パルミスを紹介して義理の兄弟関係を結ぶはずであった。しかし、シュレナの力を恐れたパコリユスの父王オロードが彼を自分の娘と結婚させようと願い、かつアルメニアと親交を結ぶため、シュレナの愛するアルメニアの王女ユリディースと息子パコリユスを結婚させようと企んだ。このため、シュレナとパコリユスは恋をめぐる緊張関係に突入し、彼ら間の調和関係は壊れた。それが悲劇の始まりであった。

シュレナは、政治的緊張を解消するためオロードが提案したこの義理の親子関係という新しい調和を拒否した。彼には義理の親子という関係も争いを終わらせることはできないと分かっていたのだ。

あなたは義理の息子という幸せな名前が、

⁵⁰ Pierre CORNEILLE, *Pulchérie*, acte V, scène vi, v. 1677-1687.

私の破滅が決まっているときにも、私を守ることができると思いますか。
自然と、その法則にもかかわらず、
王の半数は肉親殺しによって生まれたというのに⁵¹。

シユレナは愛情を選んだためだけが理由で死んだのではない。彼自身が言っているように彼の罪は愛ではなく、彼の栄光にあった⁵²。そこに彼が死ななければいけない理由があった。

義理の兄弟としての調和の不可能性に始まるこの悲劇は、義理の親子としての調和も不可能であるということを示し、終わりを迎える。どのような和解もあり得ない。コルネイユ最後の悲劇は、最も高められた悲劇性を持っていたのだ。

結論にかえて

ピエール・コルネイユの悲劇作品を読み返してみると、そこに見られる対立関係は、初期では結婚によって義理の兄弟となることで解消されている。ところが、本来の兄弟の争いはそのような手段では解消されることはなく、新しい方法が求められるようになっていく。そこに結婚により義理の親子関係を結ぶという手段が次第に重要なものとなる理由を見出すことができるのではないかということを示してきた。

最後にピエール・コルネイユ自身のことを考えてみると、彼は弟のトマとは生涯、仲がよかったと伝えられている。1662年ルーアンからパリに移ってきたときも、同じ家に住むことにしているほどであった。また、1640年にピエール・コルネイユはマリ・ド・ランペリエールという女性と結婚しているが、その10年後にトマ・コルネイユはマリの姉妹であるマルグリット・ド・ランペリエールと結婚している。このようにピエールとトマ兄弟は生涯仲が良かったように見え、確かに、ピエールの作品で和解とは兄弟となることであったことが納得される。しかし、ピエール・コルネイユが作品の中に、親子関係としての和解という新しい秩序を持ち出した1665年あたりのことを考えてみるならば、この時期は兄ピエールのほうは作品がほとんど当たらなくなっていたのに対して、弟トマの方の人氣が上昇してきており、兄弟としての秩序が崩れてきた時期でもあったのではなからうか。このような結論に

⁵¹ *Ibid.*, acte V, scène iii, v. 1637-1640.

⁵² *Ibid.*, v. 1651.

安易に飛びつくことは危険であることは承知していながら、そのような読みに誘いかける変化がコルネイユ悲劇における結婚の役割に見られたのもまた事実である。また、今回は、コルネイユのほぼ全ての悲劇を通して見られる変化に焦点を絞ったため、個々の作品に対する考察に欠けてしまった。コルネイユの生涯と作品との結びつきに関する考察を含めて、今後の課題にしておきたい。